

読解力などの言語能力等育成のための取組 ～アカデミック・ライティングの指導を通して～

1 これまでの研究と課題

本校（佐賀大学教育学部附属小学校）では、これまで、佐賀大学教育学部附属中学校と連携し、『「主体的・対話的で深い学び」を実現する義務教育9か年の学びの研究～資質・能力の育成方策の工夫を通して～』をテーマに研究を進めてきた。平成30年度～令和元年度までは、文部科学省：平成30年度～令和元年度「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえた主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点からの学習・指導方法の改善の推進」事業を受託し（以下、受託事業という。）、指導方法の改善に努めてきた所である。さて、その研究の中では、図1にあるような、「意識化」「可視化」「社会化」という3つの視点を設定した授業改善を行ってきた。研究では、この3つを次のように定義していた。「意識化」とは、「現在やっていることや状況がわかること」である。「可視化」とは、「見えていないものを見えるようにすること」である。「社会化」とは、「日常生活や社会生活で普通に使うこと。続けていつも使える状況にすること」である。これらの研究の中では、意識化から可視化する際に、児童の中で言語の必要感が高まり、その可視化したものを社会化する際によりその言語が精緻化されていくような傾向の実践が見られた。すなわち、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習・指導方法の改善においては、児童の言語能力が大きく影響するということが明らかにしてきたのである。このようにして、資質・能力を育成する視点として設定した3つの視点を基に実践する中で明らかになってきた各教科等の言語活動について、その具体的な手立てを積み重ね、整理することが今後の課題となっている。



図1 資質・能力を育成する3つの視点

同時に、受託事業では、「授業づくり」部会を設置し、考えるための技法として、「思考スキル」（小学校）「B-Time」（中学校）の接続を行ってきた。この成果として、「比較する」「構造化する」において、具体的な活用例がまとめられ、今後は、各教科等で作成した「資質・能力デザイン」の活用方法として「思考スキル」「B-Time」との関連をさらに進める必要があることが課題となっている。また、考えるための技法をどのように各教科等の学びと結び付けていくのかという、その具体的な実践の積み重ねも研究の課題となっている。

2 研究課題

各教科における言語能力やその育成方法について整理し、それらを基にするアカデミック・ライティングの指導を中心とした取り組みを実施し、その効果を検証する。

3 研究課題設定の理由

「読解力」「言語能力」と一言で言っても、それらはかなりの拡大解釈が含まれ、一般的すぎる。学校教育においてこれまで言われてきた「読解力」「言語能力」に関する指導とは、児童の問題解決の文脈に沿った中での話である。そこでは、この「読解力」「言語能力」を各教科等の目標と文脈の中に落とし込んだものが多く、それに即した指導を行ってきた。その指導は、各教科等の目標に沿った学習内容や指導事項に準じたものであり、各教科等内で閉じた状態での「読解力」「言語能力」の育成を目指してきたといえる。

しかし、予測不能な社会を見据え、児童が問題解決の場面で求められる問題の文脈は複雑なものとなり、各教科等の内に閉じた「読解力」「言語能力」の習得と活用だけでは解決できない状況が

ある。知っているだけに留まらず、知っていることを使って解決することや、多面的、複合的な視野をもつ教科等横断的な「読解力」「言語能力」が求められ、考えたことや導き出した解を伝えるために、どのように表現するかということも求められているのである。

各教科等で育む基盤となる「言語能力」の育成はもちろんのこと、情報を多面的・多角的に精査し、構造化する力や、新しい問いや仮説を立てることで、既にもっている考えの構造を転換する力をつけていくことが必要である。それらを実現するために、より現実の文脈に沿った問題解決場面において、アカデミック・ライティングの習得と活用に向けた指導が必要なのである。

4 研究の概要

本校におけるアカデミック・ライティングの定義を「児童が各教科等の学習内容の理解を深め、思考力・判断力・表現力等を高めるために、目的や必要に応じて報告文・意見文・提案文（＝以下、報告文など）を書くこと」と設定した。さらにその指導に当たっては、【A】「アカデミック・ライティングについて学ぶ段階」と、【B】「アカデミック・ライティングの技術を用いて、書く段階」とに分けて整理をしている。【A】「書くまでに（書きながら）獲得すべきこと」では、以下のように設定した。

- ①書き方の構造・手順を知る
- ②「問い」と「答え」が明確に対応する文章であることを知る
- ③「答え」の根拠となる情報を用いて、説得力のある文章にするということを知る
- ④引用などのルールを知る

また、【B】「実際に書くときの手順」では、以下のように設定している。

- ①課題をみつけ、「問い」と「答え」の形に直す
- ②調べて、「答え」と、根拠となる情報（資料）を探す
- ③情報を整理して、項目ごとにあてはめる
- ④読み返し、文章や情報が正しいか、読みやすいかを考える
- ⑤ルールに従い、表現を整える

調べながらゴールにたどり着くのではなく、あらかじめゴール（結論・答え）を仮に設定し、根拠を明らかにするという目標に向けて学習を進めていくことが、自分が既にもっている考えの構造を転換することとなる。そこから新たな問いや仮説につなげることで、自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度を育てていく。

また、調査を通して得られた情報を分析し、論理的に結論を導くためには、情報を多面的・多角的に精査し構造化する力を身に付ける必要がある。その「認識から思考へ」「思考から表現へ」という過程において、言語能力を構成する資質・能力を働かせることが言語能力の育成につながる。

さらに、これまでの本校の研究においても目指してきた、「各教科等で身に付けた資質・能力を、目的に応じて用いることができる児童」や「身に付けた資質・能力を、汎用的(教科横断的)なものとして柔軟に用いることができる児童」の実現につながるとも考える。

そこで本研究では、これまでの本校において、研究で積み重ねてきた各教科等の「読解力」「言語能力」等の育成を含んだ研究をベースに、アカデミック・ライティングの指導と、より現実の文脈に沿った問題解決場面において、児童が言語能力を発揮する場面の特徴的な姿や育成方法、その基盤づくりの方策について明らかにしていくこととした。

5 具体的概要

具体的概要としては、以下の4点である。

- ア) 各教科等における「言語能力」の育成方法の明確化
- イ) アカデミック・ライティング指導の計画と実践
- ウ) 「言語能力」育成状況の多面的測定

エ) 「言語能力」育成のための指導方法の改善と発信

以上のことを、複数の教科等研究を同時に行っているという附属小学校の強みを活かして行っていく。一面的な研究ではなく、それぞれの専門性を活かし、大学の先生方の協力も得ながら多面的、構造的な研究になるよう創り進めていく。

6 研究の構想

ア) 各教科等における「言語能力」の育成方法の明確化

各教科等で大切にしてきた「読解力」「言語能力」の育成方法を用い、その指導方法と指導過程を児童の姿を基に整理していく(図1でいう「可視化」「社会化」の手立ての精選)。さらに、各教科等における、固有の言語能力の育成という点からの整理を行う。その指導にあたっては、発達の段階に応じて、ICTの利活用も含めた指導計画と実践を行い、GIGAスクール構想下における「言語能力」の育成方法という点からの検討も加える。

イ) アカデミック・ライティング指導の計画と実践

各教科等における「言語能力」の育成方法を基に、そこで用いる様々なツールと、思考スキルとを組み合わせた上でのアカデミック・ライティング指導を発達の段階に応じて計画し、実践化する。その指導にあたっては、「仮説を立て、調査を通して得られた情報を分析し、論理的に結論を導く考え方を身に付け、自己の生き方を考えることができるようにしていく」学習過程を経ることができるよう生活科及び総合的な学習の時間を中心に行う。ここで、ICTの利活用も含めた指導計画と実践を行う。

ウ) 「言語能力」育成状況の多面的測定

児童の「言語能力」の向上を測るための取組を幾つか取り入れる。1つ目は、学力の到達度を測る標準学力検査CRT/目標基準準拠検査であり、2つ目はNINO認知能力検査であり、3つ目が、読書力診断検査である(いずれも図書文化社)。いずれも、量的なデータが得られるものである。さらに、「言語能力」が、提示/解答方法によって影響するかどうかを測るために、同一問題を異なる提示/解答方法(ICT利活用での提示/解答群・紙面での問題提示/解答群・ICTでの問題提示/紙面解答群)による独自の調査を行う。その際、特に「情報処理能力」に主眼を置き、この調査を経る中で、紙面の有無や解答方法の違いによる影響を測る。

また、アカデミック・ライティングの成果を評価するための指標となる問題を作成する。本校ではアカデミック・ライティングで指導可能な言語能力として以下の4点を設定した。

- | |
|--|
| ①情報を読み取る力
②情報を比較し、読み取る力
③読み取った情報を基に自分の意見を表現する力
④仮説を立てる力 |
|--|

これら进行评估する際、目的や必要に応じて資料を選択し、考えを記述することができているかという視点で国語、算数、社会、理科の4教科に関する問題を作成(言語能力に関する検査①)することに加え、教科の枠を取り払い、言語能力を総合的に見ることができ問題を作成(言語能力に関する検査②)して実施することにより、年間の指導を経ての変化を調査する。

エ) 「言語能力」育成のための指導方法の改善と発信

以上のような検討を経て得られた知見を、授業改善に反映させていく。そしてどのように取り入れ、実践したのかという点を、読解力などの言語能力等育成のための取組という観点でまとめ、発信する。さらにそのフィードバックを得る中で、更なる改善を図る。

(1) 効果検証のための指標について

No.	検証のための指標	実施主体	具体的な検証内容
1	標準学力検査CRT ／目標基準準拠検査	株式会社 図書文化社	基本的な学力の到達状況を測定し、全国平均との比較を行う。さらに経年的な結果と比較し、本研究の有効性について検討を行う。
2	NINO 認知能力検査	株式会社 図書文化社	児童の認知能力についての検査を研究前後で比較し、研究を検証する。
3	読書力診断検査	株式会社 図書文化社	児童の読書力についての検査を研究前後で比較し、研究を検証する。
4	言語能力に関する検査 ①②	佐賀大学教育学部 附属小学校	①同一問題で提示／解答方法が異なる検査を設定する。「言語能力」と共に、紙面の有無や解答方法の違いによる影響を測る。②アカデミック・ライティングの指導に関する検査を研究前後で比較し、研究を検証する。
5	保護者へのアンケート 調査の結果	佐賀大学教育学部 附属小学校	児童の言語能力育成及びアカデミック・ライティングの指導に関する状況を検証する。
6	児童への聞き取り調査 の内容	佐賀大学教育学部 附属小学校	言語能力育成及びアカデミック・ライティングの指導に関する状況を検証する。
7	公立学校教員へのアンケート 調査の結果	佐賀大学教育学部 附属小学校	児童の言語能力育成及びアカデミック・ライティングの指導に関する状況を検証する。

(2) 指標に関するデータの取得方法（時期、回数等）

No.	検証のための指標	データ取得の時期、回数等
1	標準学力検査CRT ／目標基準準拠検査	令和4年1月、令和5年1月にそれぞれ1回ずつ、全校児童に対して学力検査を実施する。
2	NINO 認知能力検査	令和3年6月（研究開始前）と令和4年12月（研究開始1年経過後）とで実施し、認知能力としての変化を測る。
3	読書力診断検査	令和3年6月（研究開始前）と令和4年12月（研究開始1年経過後）とで実施し、読書力としての変化を測る。
4	言語能力に関する検査 ①②	令和3年6月（研究開始前）と令和4年2月、令和4年5月、令和4年12月と合計4回で実施し、言語能力に関する変化を観察する。
5	保護者へのアンケート 調査の結果	9月以降から令和5年3月までの1年6か月の間に2回、生活科及び総合的な学習の時間で得られた児童の成果物についての保護者アンケートを実施する。または、授業参観後にアンケートを実施する。
6	児童への聞き取り調査 の内容	令和4年1月及び令和5年1月の2回、児童に対してアンケートを実施する。
7	公立学校教員へのアンケート 調査の結果	令和3年11月と令和4年11月の2回、公立学校教員に対してアンケートを実施する。

7 研究の実施スケジュール

(1) 1年目（令和3年度）

令和3年4月 「言語能力」を統合して解決する場の構想・問題作成

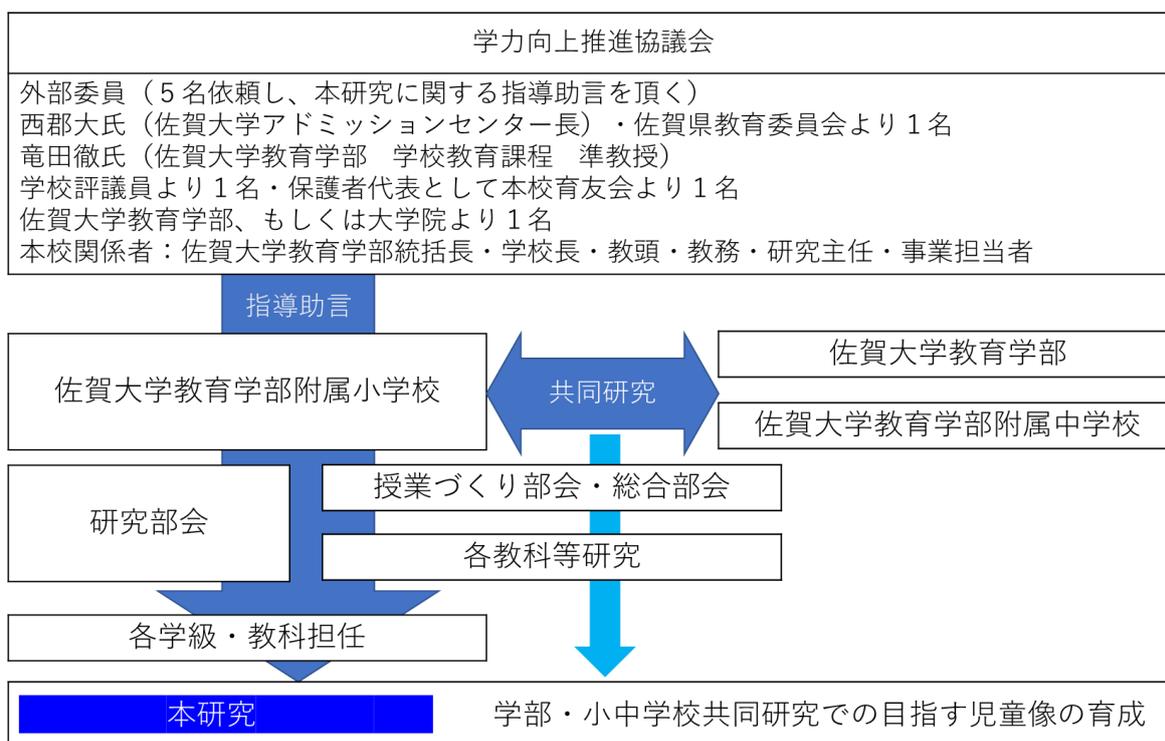
令和3年5月 文部科学省における連絡協議会

- 令和3年6月 「言語能力」を統合して解決する問題の実施
NINO 認知能力検査／読書力診断検査の実施
- 令和3年7月 学力向上推進協議会（第1回）開催
- 令和3年8月 各教科等における「言語能力」の育成方法の明確化
アカデミック・ライティング指導の計画
- 令和3年9月 取組開始
- 令和3年11月 研究発表会の実施、学力向上推進協議会（第2回）開催
- 令和4年1月 CRテストの実施
- 令和4年2月 「言語能力」を統合して解決する問題の実施
- 令和4年3月 学力向上推進協議会（第3回）開催
アカデミック・ライティング指導の改善・検討

(2) 2年目（令和4年度）

- 令和4年4月 保護者への説明
- 令和4年5月 学力向上推進協議会（第4回）開催
「言語能力」を統合して解決する問題の実施
- 令和4年7月 学力向上推進協議会（第5回）開催
- 令和4年8月 各教科等における「言語能力」の育成方法の明確化
アカデミック・ライティング指導の改善・検討
- 令和4年11月 研究発表会の実施
学力向上推進協議会（第6回）開催、公立学校教員へのアンケート
- 令和4年12月 NINO 認知能力検査／読書力診断検査の実施
「言語能力」を統合して解決する問題の実施
- 令和5年1月 児童への聞き取り調査・CRテストの実施、学力向上推進協議会（第7回）開催
- 令和5年3月 学力向上推進協議会（第8回）開催

8 研究の実施体制



※なお、竜田徹氏については、随時助言をいただく。